

特集＝新教科書をひらく

新課程用教科書

Grove English Expression I 構成と特色

埼玉大学准教授 田子内健介



はじめに

今回の高等学校学習指導要領改訂に伴って再編された外国語科目のうち、「英語表現Ⅰ・Ⅱ」はおよそ現行の「ライティング」と「オーラル・コミュニケーション」を統合したものと捉えることができます。「英語表現Ⅰ」は、書く・話す・発表するといった自己を表現・発信する力に焦点を当てており、基礎的コミュニケーションスキルの学習・定着を主眼とした科目と見なせるでしょう。

Grove English Expression Iの構成

英語で自己を表現し発信していくためには、書く場合であっても話す場合であっても、文法を正確に学習しておく必要がありますし、また語彙も豊富でなければなりません。Grove English Expression I(以下『グローブ英語表現Ⅰ』)の執筆に当たっては、この「発信力」に欠かすことのできない、表現の基礎となる文法と語彙の学習を効果的に行っていくよう、様々な配慮をしました。

① WARM-UP

冒頭の WARM-UP は「英語の文のしくみ～日本語との違いを確認しよう～」と題し、日本語と比較しながら英語の文の基本形、名詞の可算・不可算と単数・複数の区別、主部と動詞の一致、疑問文における語順の変化を解説しています。どれも高校レベルでは独立した文法事項として取り上げられることの少ないものかもしれませんが、英語で文を組み立てるといふ、表現の根幹に当たる 作業においてぜひとも押さえておかなければならない極めて重要なことばかりで

す。また、日本人英語学習者の犯す誤りのかなりの部分に関わる事項でもあると言えるでしょう。確認のための簡単な問題も付してありますので、正課に入る前にぜひとも時間を割いていただきたい部分です。

② UNIT1, 2の構成

続く UNIT 1 と 2 の LESSON 1 から 20 が『グローブ英語表現Ⅰ』の中核部分となります。ここで各課 2 つずつ学習していく文法事項は、まずその学習順序に気をつけました。文構造の点から言えば、「単純なものから複雑なものへ」という原則に基づいて配列されています。UNIT 1 はいわゆる 5 文型および there 構文を含む基本的な単文構造を、UNIT 2 は比較構文や関係節、仮定法といった複文構造を扱っています。構造的な複雑度が学習上の難度と相関するとは限りませんが、このような配列は段階的で着実な進歩を助長するものと思います。また意味内容の点からは、時制・現在進行形・現在完了形・助動詞・受け身といった、動詞に関連した項目をすべて UNIT 1 で学習するようにしています。この背後には、(定形)動詞が文の中心であって、そこに集約されるテンス・アスペクト・モダリティー・ボイスといった概念を早い段階でしっかりと身につけることが、発信力の確かな土台を与えるとの考えがあります。

③ 基礎力をつくる

各 LESSON は、学習する文法項目に対応する日本語の表現をイラストに基づいて考えることから始まります。いきなり英文、ましてや文法用語を与えるのに比べれば、生徒にとってずいぶんとつつきやすい

導入の仕方ではないかと思います。そして POINT A および B として文法事項が挙げられ、例文は文法事項を自然な形で示すと同時に、暗唱例文としても利用できるよう、簡潔かつ広く応用できる形になるよう配慮がなされています。例文に続く PRACTICE と DO IT YOURSELF の確認問題をこなしていくことで、文法事項の定着が図れるでしょう。なお POINT 例文および問題英文は、すべて各 LESSON のテーマに即したものとなっており、テーマに関連した語句を含んでいます。例えば「夏」をテーマとする LESSON 7 では、POINT 例文に watermelon, fridge, cool といった単語が、問題英文内にはさらに beach, seashell, cicada, ghost story, heat, mosquito, fireworks display などといった、夏に関わる事物を表わす語句が次々と出てきます。これは『グローブ英語表現 I』の前身とも言える POWWOW ENGLISH WRITING にも見られた特徴ですが、あるテーマに関連した語句を豊富に持つことは、テーマから逸れずに (sticking to the point) 文章や会話を展開していくという英語表現スタイルを実践するための第一歩ともなります。文法学習と同時に関連語彙を増やすという有機的な学習を通じ、諸英語表現活動の支えとなる基礎力をしっかりと身につけてもらいたいと考えています。

④ 発信力をみがく

学習した文法事項・重要表現を実際に使用してもらうための場も用意されています。テーマに関連した 3 文からなる英文を書く CHALLENGE と、与えられた出だしに続けてパートナーと自由に話し合う TALK WITH A PARTNER です。いずれも生徒の負担とならないよう、必要となる単語や表現をヒントとして多数挙げています。これら書く・話すという活動を通じ、生徒は文法が表現の基礎としてコミュニケーションを支えるものであるということが実感できるでしょうし、実際に使ってみることでそれまで気づかなかった点に注意を向けたり新たな発見をしたりすることもできるかもしれません。第二言語習得研究の

分野では、習得にとってインプットだけでなくアウトプットも重要であると言われています。CHALLENGE と TALK WITH A PARTNER は『グローブ英語表現 I』正課においてアウトプット活動の機会を与える重要な部分ですので、活動の仕方やフィードバックの与え方などにも様々に工夫を加えるなどして、十分に活用していただければと思います。なお UNIT 1, 2 に計 4 回含まれる HOW TO MAKE A SPEECH も合わせて活用することで、アクセントやイントネーションといった発音要素に目を向けたり、姿勢や声の大きさなど発表の仕方に気をつけたりと、アウトプットの実践の場をさらに広げていけるでしょう。

⑤ SUPPLEMENTARY PRACTICE・APPENDIX

SUPPLEMENTARY PRACTICE はパラグラフの書き方を扱います。一般的なパラグラフの構成を明確にするとともに、「比較・対照」や「原因・結果」、「賛成・反対」といったタイプごとによく用いられる表現やつながり語句をまとめた上、練習問題を提示しています。論理展開に注意して考えをまとめ、ある程度の分量の文章を書くという高度な表現活動の場であるとともに、諸英語検定試験のエッセー問題などへ向けての準備・対策としても役立つでしょう。巻末の APPENDIX には「文法のまとめ」や「単語集」、「イディオム・表現リスト」や「E メール形式」が含まれます。

おわりに

以上、『グローブ英語表現 I』の構成と特色を駆け足で見ました。「英語表現 I」は多くの学校で 1 年次に履修となる模様ですが、並行履修となる「コミュニケーション英語」がどのような形で指導されるかに応じ、異なる側面に重点を置いた扱いを受けることになるでしょう。その重点が文法であれ、ライティングであれ、またはコミュニケーション活動であれ、指導する先生方にとっても学習する生徒たちにとっても、『グローブ英語表現 I』が有益な学びを提供することを期待します。